

The Witch of Liblia

# リブリアの魔女

日野祐希

くらはしれい 絵

Alicekan



あとがき  
268

エピローグ  
265

最後の試験  
226

第二の試験  
182

ヴェラム牧場日誌  
134

マープル漁業体験  
97

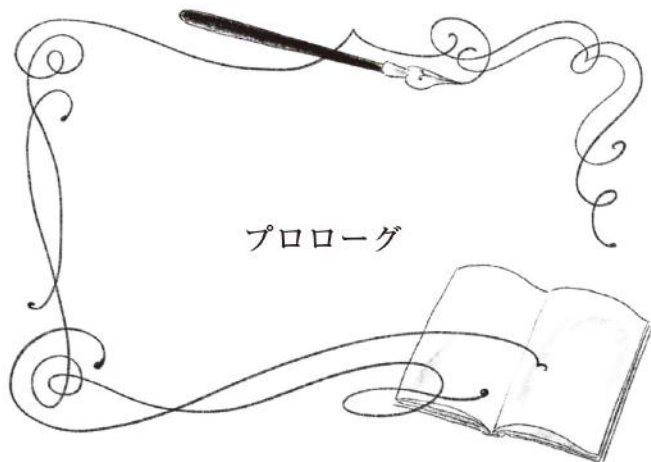
グロリエ捕り物帳  
56

弟子見習いメノア  
10

プロローグ  
5

Alice Kan





## プロローグ

やわらかく温かな陽ざしが東の空から街を明るく照らし、小鳥たちのさえずりが一日の始まりを告げる。

人々が行き交い始めた通りには、開店したばかりのパン屋から焼き立てパンのにおいしそうなにおいが漂ってきいた。

少しひんやりとした、しかし過ぎやすい朝だ。

リブリア王国の王都・コデックス。その外れにある、ここ、ルリユール通りは、今日もさわやかな目覚めを迎えていた。

しかし、中にはそんな目覚めを真っ向から拒否する輩もいる。

「すびー、すびー。むにやむにや……」

ここは、ルリユール通りに面した、とある工房の二階にある一室だ。

足の踏み場もないほど散らかった部屋。その中で唯一の

Acekan

安全地帯と言えるベッドで布団にくるまり、その女性はとても幸せそうに眠りこけていた。

きちんと整えられていれば、さぞきれいであろう白銀の髪に寝ぐせをつけ、窓に背を向けるように寝返りを打つ。どうやらカーテンの隙間から入ってくる朝日を嫌ったらしい。その仕草一つで、まだまだ惰眠をむさぼる気であるのが伝わってきた。

すると、その時だ。  
「先生！ いつまで寝ているんですか。もう朝ですから、さっさと起きてください！」  
「ワンワン！」

バンツ！ と部屋の扉を勢いよく開けて、一人と一匹が部屋に侵入してきた。

一人は、十代前半の少女だ。長い赤毛を二本の三つ編みにした、真面目そうな女の子で、翡翠色の瞳をまっすぐベッドの上の女性に向けている。

そして一匹は、背中に小さな羽をはやした仔狼だ。好奇心いっぱいキラキラした瞳で部屋の中を見つめ、楽しみに尻尾と羽を振っている。

少女は床に散らかった服やら小物やらをかき分けながら部屋の中を進み、カーテンを一気に開けた。

「ほら、こんなにいい天気ですよ。早く起きて、今日も元気にお仕事しましょう！」

朝日をバツクに、少女が笑いかける。清々しさにあふれた笑顔だ。

一方、さわやかな笑顔を向けられた女性の答えは、これである。

「あと半日……」

モグラのようにもぞもぞと布団の奥深くにもぐりこみ、「すぴー」と二度寝を始めた。

同時に、少女は額に手を当て、やれやれ今日もか、とため息をつく。そして、布団を一気に引きはがした。

「あと半日って、どれだけ寝るつもりですか。『一体いつまでかかるの？』ってお客様からクレームも来てるんですから、さっさと起きて魔導書を作ってください」

肩をゆすってみても、女性は幸せそうな寝顔で「すぴー」と寝息を立てるのみだ。

少女はもう一度ため息をつき、足元の仔狼を抱き上げた。

「先生が悪いんですからね。後で文句言わないでくださいね」

これだけやっても起きないのなら、もはや最後の手段に出るしかない。少女は一応断りを入れた上で、ベッドの上に仔狼を降ろす。

すると、仔狼のつぶらな瞳がキラッと輝いた。

「メル、今日も先生に遊んでもらいなさい」  
「ワン！」

少女からの号令を受け、仔狼——メルが眠りこける女性の銀髪をくわえて引つ張り、頬をペるペると舐め始める。メルは好奇心いっぱい遊びたい盛りのお赤ん坊だ。

「遊んで、遊んで——」という声が聞こえてきそうな勢いで、遠慮なくじゃれつく。

「のわーっ！ ちょっとメル、髪を食べないで！ メノア、メルをどかして！」

今日もメルの遊んでアピールに敵わなかった女性は、跳ね起きながら少女——メノアに助けを求める。

すると、メノアはにっこりとほほ笑み、ぺこりとお辞儀をした。

「おはようございます、シエリル先生。ようやく起きてくれて、うれしいです」

「いや、あいさつなんていいから、まずメルを——」

「じゃあ、わたしは朝ごはんの支度がありますので。二度寝しないで、メルといっしょに下りてきてくださいね！」

先生と呼びつつも、女性——シエリルの言葉には一切耳を貸さず、メノアはメルを放置して部屋を後にする。言われた通りメルを回収すると、シエリルは確実に二度寝する

からだ。

シエリルの部屋からは、ドッスンバツタンとにぎやかな音が聞こえてくる。

それをBGMにしなげら、メノアは「今日はどんな修業をするのかな？」と鼻歌交じりに階段を下りていくのだった。

# Alice